

# 戦時下の文学 △その四▽

## 安永武人

### 四 文学の転向

いわゆる十五年戦争が深刻化してゆく過程で、神格化にともなう天皇信仰が、国民精神の中枢に位置をしめ、それに同調しない立場や思想は極度に弾圧された。男子普通選挙法とひきかえに、一九二五（大正十四）年に成立した治安維持法が、その後、国民思想の支配に猛威をふるったことは周知の事実であり、それによって検挙された人たにくわえられた拷問のすさまじさは、たとえば小林多喜二の「一九二八年三月一日」にもなまなましい。したがって思想の科学研究会が「転向」を、「権力によって強制されたためにおける思想の変化」<sup>①</sup>ととらえたのは、当をえているといわねばならぬ。あるいはまた主体にそくして「日本の近代社会の構造を、総体のヴィジョンとしてつかまえそこなったためにインテリゲンチヤの間にこった思考変換」<sup>②</sup>というのにも異論はない。そしてその「転

向」の究明にあたって、

転向は、外的強制力と個人の思想とのかかわりあいとしておきるのであるから、権力の側から強制力の発動の状況として記述することもできるし、個人の側からその思想の屈折として記述することもできる<sup>③</sup>。

とするのも、政治的「転向」をとらえる方法としては妥当であろう。しかしこの時代の文学を「転向」とのかかわりにおいて、文学のがわから問題にするばあいは、これらの定義や方法では、かならずしもじゅうぶんだとはいえないのではなからうか。なるほど、

転向文学というものを、転向の問題をあつかった文学、すなわち、共産主義者の共産主義抛棄、ないしは共産主義者の共産主義運動からの離脱の問題をあつかった文学、あるいはもう少しひろくいて、転向問題を制作の主要動機とする文学<sup>④</sup>。

と限定してしまうのもひとつの方法であろう。しかし、十五年戦争

下の文学が、文学であるためには、どうしても回避することを許されなかった天皇制ファシズムの君臨する非人間的時代環境との対決、そのたたいの過程、あるいはその結果ひきおこされた文学の屈折・逃避までも視野のなかにおこうとすれば、プロレタリア作家にかぎらず、まして政治的「転向」を起点とする文学だけにかぎらず、なんらかの傷痕をこうむらざるをえなかった文学作品の存在を無視できないであろう。また文学そのものを軸として考えれば「権力の側から」の「強制力の発動」だけが作家の「思想の屈折」を、ひいてはその文学の変質をもたらした原因とするのにも全面的には同調できない。「暗い谷間」の巨大な動きは、非転向作家の文学をも変質させる——たとえばプロレタリア文学を伝統的な「私小説」へ回帰させる——力をもち、作家によっては表現の自由をみずから規制し、その結果、創作した作品に逆に自己が繫縛されて、その後作家主体および文学の変質を招いたばあいもあったはずである。天皇制イデオロギーに密着しないまでも、そのファシヨの脅威を眼前にしたとき、なほどこか危険への本能的防禦姿勢をとらざるをえなかっただろうし、それによって表現の抑制・変質を招かねばならなかった作家もすくなくあったであろう。さらにまた、超国家主義思想の跳梁する時代に、その影響下で自己の精神の根底に、伝統的に形成され隠蔽されてきた「日本的なもの」の覚醒を自覚した

#### 戦時下の文学（その四）

作家が、みずからすすんで時代風潮によりそう姿勢をしめし、文学的再出発を宣言したケースもあったのである。戦時下の文学史的展望をもととすると、プロレタリア作家の「転向」を軸とするとえかたもあるだろうが、それをふくめて、天皇制ファシズムと文学との対抗関係、そこに微妙にあらわれる文学主体の変化に視点をおいてとらえることもできるはずだ。というのは、プロレタリア文学運動のなかでいわれたのとはちがった意味で、「政治」と文学との関係が、国家権力がわからあらためて問われた時代であり、それはまた文学をこえて、その時代の日本人が、生きかたの問題としていやおうなく直面させられた権力の強制でもあったからである。戦没学生の遺稿「きけわだつみのこえ」ひとつをとりあげてみても、その強制にこたえようとして、つまり、公状況に私状況を適應させようとして、苦悩にみちた精神のよじれと悲鳴を表現しているし、ようやく定着したその表現によって、自己を説得しようとしていたましい姿をみる事ができるのだ。

文学の「転向」は政治的「転向」のように明確なかたちをとらず、心情の隠微なゆらぎのうちに、作家自身にも自覚されないまま進行し、しかも自己表現にはかならず文学として成立するとき、それは作家の主体を拘束し、しだいにいままでの文学的立場から「天皇制への帰順」<sup>⑤</sup>の方向へ転換していったばあいもあったのである。

そのようなものとして文学の「転向」をとらえたい。

- ① 共同研究「転向」上巻(平凡社)五頁。
- ② 吉本隆明「芸術的抵抗と挫折」(未来社)一六九頁。
- ③ 注①におなじ、九頁。
- ④ 本多秋五「転向文学論」(未来社)一八七頁。
- ⑤ 前注におなじ、二一六頁。

## I 林房雄のばあい

### 1

林房雄は、書簡集「獄中記」の「あとがき」に、つぎのようにしている。

例へば、第二十信に於ける「転向論」の如きは、思考の未熟と精神の脆弱を現して余りがある。「非転向論」の如く見えて、実は転向への第一歩である。人の心といふものゝ微妙さよ。私のマルクス主義よりの離脱は既にこの頃から始まつたらしい。

ここにいう「第二十信」とは、出獄を半年後にひかえた一九三一年(昭和六)年十月二十一日の発信であり、この「あとがき」は一九四〇(昭和十五)年二月の述懐である。一九三三(昭和八)年の有

名な佐野・鍋山の転向声明いせんの私信に、林がすでに転向の兆候があったとするのは、どういふところにおいてだろうか。

昔の社会主義者はよく獄内で改宗しました。ところが今の社会主義者は改宗しようにも改宗のしやうがありません。プロレタリアートの力が強くなり、その国家さへ出来てゐる仕末なので、若し改宗したら自分の無智と浅薄を告白するだけで、一時代前のやうに「深刻な内的体験の結果」だなどゝ威張るわけには行かないのです。はなはだ悪い時代に生れ合せたといはなければなりません。まゐ。今は改宗も出来ない時代です。

というのが、かれのこの書簡における中心的な意見であるが、これだけを見るならば、かれもいふやうに「非転向論」としてうけとられるであろうが、これにひきつづいて微妙ないまわしがある。

「獄中の煩悶で一ばん悲惨なのは、自分の主義に疑をいだき、その主義に基いた自分の過去の一切の行動を信じ得なくなった」ときであるとして、そういう動揺をひきおこしやすい条件を獄中は昔も今ももっていること、そのうえ「一時代前には、この動揺が始つた時、断然とそれを喰ひとめるだけの確固とした反証が現実の社会に存在してゐなかつた」こと、だから「純粋に、まじめに考へつめ動揺しそして改宗した」「昔の社会主義者の獄中改宗には同情すべき事情が多々ある」ことをあげ、それにひきかえ、いま改宗するのは

「きはめて不純な不まじめな考へ方にたよるよりほかはありませぬ」といふ。ここで注目されるのは、いまの社会主義者が、思想的動播におちいったり、さらには転向へふみこんだりしない理由として、現実にはプロレタリアの国家が存在し、あるいは社会にその階級が実在することをあげていること、したがって、そういうもの存在しなかった時代の転向はやむをえなかったと判断し、しかもその転向は「純粹に、まじめに」おこなわれたとしていることなどであろう。このような論理を、「転向への第一歩である」とみずから認定したのはなぜか。そのことをあきらかにするまえに、この論理そのものもつ潜在的な問題にふれておくべきであろう。非転向をささえる強力な基盤であるとかれがいう実在するプロレタリアートの国家・社会が、なんらかの事情で予想外の変化をみせたり、またそれらへの評価に変動がおこったりした場合、その抱懐する社会主義思想も同時に自壊作用をおこす可能性をもつわけであるから、このような外的条件にささえられた非転向は、すこぶる不安定なものとなるであろう。しかも、それが「不純な不まじめな」動機でなく、「純粹」で「まじめ」な動機であるのみならずがみとめうる条件を獲得することがあれば、主義の放棄が許容され、ひいては積極的にその転向が肯定されることになる。この客観的・主観的条件は、いってみればそれぞれ転向の可能性——ふたつの契機であった

といえる。そのうえこのふたつの条件は相互に牽引しあう関係にあるのだから、その不安定度はさらにおおきくなる性質のものともみてよいだろう。

ところで、林房雄が、この第二十信いぜんにも、たとえば、

吾々の感情は、本質的に保守的なものです。あらゆる新しいものに反撥します。「新しい」といふよりも、「慣れない」ものに出会ふと不快を感じるのです。この感情を常に統制し訓練して行くのは理性ですが、しかし、感情は理性の註文どほりにはなかく動きません。(第十二信)

とか、あるいはまた「過去十四ヶ月の思索の結果」として、

人間は、開びやく、以来たいして、変化してゐない。これから先きも、たいして、変化しない。(第十八信)

などという人間認識をもっていたということは、転向への「純粹」で「まじめ」な動機といえるものを創出しやすい条件の一部が、すでに潜在していたとみることができるところが、一九三二（昭和七）年四月に出獄したかれが、まもなく執筆した「文学のために」には、この問題にかかわる意味深長な一節がある。

刑務所といふところは、妙なところで（中略）あそこにはいると、自分のしたことが、自分の過去が、じつになにもかも、恥かしくて恥かしくてならなくなる。（中略）まったく冷汗がなが

れ、身ぶるひがし、しまひには大声をださなければふるひおとせないほど深く身を刺す、自悔の感情の荒れまはりを経験した。

（中略）この致命的とさへいひたい自悔の中から、わづかに自分を救ひだしてくれたのは、社会主義者としての自覚であった。まがりなりに、道のために、主義のために、自分はたたくつてきた。そしてなほ自分の心の底には、主義をまもらうといふ気持、自分を歴史の正しい流れの中におかうといふ気もちがきえてゐない、といふことを、胸の奥をさぐることによつて知ることができるとき、わづかに僕の気もちは、救はれるのであつた。

「自分の過去が、じつになにもかも、恥かし」いというのが、具體的にどういうことをさすのか不明であるけれども、「主義に基いた自分の過去の一切の行動を信じ得なくなった」「悲惨<sup>⑩</sup>」さにかなり近い、あるいは「主義」と「行動」とが分離しはじめているといふべき状況におちいつていることを想像させるし、また自己をささえるのがプロレタリアートの存在する社会的「現実」ではなくて、自身の「社会主義者としての自覚」ということになる、いっそう主観的な、かつ孤立的な状況にまで変化しているともいえるであろう。まして「歴史の正しい流の中に自分をおくことにつとめ、ねがはくば死<sup>(つて)</sup>の床で恥ぢない良心をもつて死にたいものだ<sup>⑭</sup>」といふところまでくると、まったく個人的で自己証明的な方向でしか問題

が意識されていないことを暗示している。この述懐の一カ月あとから、かれは長編小説「青年」を発表しはじめる。

⑥ 妻・繁子あての書簡集（創元社・昭和十五年二月版）。第一部は昭和五、六、七年、第二部は昭和九、十年の獄中からの書簡を年月日順に収載している。

⑦ 前注におなじ、二七一頁。

⑧ 前注におなじ、一二四頁。

⑨ 前注におなじ、一二四頁。

⑩ 六月二十一日。前注におなじ、八〇頁。

⑪ 九月二十三日。前注におなじ、一一四頁。

⑫ 「改造」昭和七年七月号。

⑬ 注⑨におなじ。

⑭ 注⑫におなじ。

## 2

「青年」は「中央公論」一九三二（昭和七）年八月号から掲載されはじめているが、この作品の着想はすでにやく前年の在獄中であったことが、

「青年」と題する大作の着想を得た。これは掛値なしの大作であ

る。うまくいったら藤村の「夜明け前」の墨を摩しかねない。まづ出来あがるのは「青年」であるが、当然これは「壮年」「老年」と三部作に発展する。(第十信)

という記述から判明する。「獄中記」にはほかに「徐徐に骨に肉がつきつつあり」とか、第十信の「夜明け前」うんぬんにいささか気がさしてか、書簡集刊行にあたってはその部分を削除するように指示しながら、なお「内心の意気込は少しも変わりません」とかいつているなど、「青年」の構想は、獄中でそうとうの進行をみせていたとみてよい。のみならず「夜明け前」うんぬんは血気の壮語にちがひなかったものの、のちのかれの「夜明け前」とのふかい関係を暗示するものであった。というのは、このとき林は「夜明け前」第一部のぜんぶをよんでいたのではなく、「中央公論」に一九二九(昭和四)年四月から三二(昭和七)年一月まで年四回の連載であった、その第九回(第八章)までをみていたと推定されるし、かれの「夜明け前」第一部読了の記事は、その連載終了後の第三十三信にはじめてみえ、のちに「文学のために」におさめられている「夜明け前」論とまったくおなじ文章が、読了記事のあとにつづいていくからだ。そこに展開された「夜明け前」への傾倒・賛美をみると、かれのこの作品にたいする共鳴の程度とその質がしられ、それについては後述するが、かれの「青年」執筆の有力な動機のひとつ

が、この「夜明け前」への感動にあったことは指摘しておかねばならない。

さらに、ここでふれておかねばならないのは、かれが獄中から注文した書物あるいは読了した書物としてあげているものの傾向についてである。獄中独房の不自由さにかかわらず、それはかなりの量のにぼっているが、とくにおおいものをあげると、明治維新前後および明治時代に活躍した人物の伝記あるいは回想録のたぐいが五三例、おなじ時期の歴史関係が三一例、意外なのは宗教・宗教史関係が二一例にのぼっていることだ。獄中では閲覧書籍が量的にも質的にも制限されていたという特殊事情を考慮にいれても、林房雄の関心が、どういふ問題に集中していたかは推測できる。とくに歴史の激動期における個人への関心がいちじるしくつよいのは、かれの歴史把握の方法が、いわゆるマルクス主義者のそれとかなり異質のものになりつつある過程を示すものであったかもしれないし、また宗教への関心は「大衆からの孤立(感)」のふかまりをものがたるものであったかもしれない。

「青年」は明治維新にさしかかる幕末期、尊皇攘夷と佐幕開国の対立騒乱の時代を背景としている。そして主人公は伊藤俊輔(博文)と井上聞多(馨)であり、いきおいその出身藩である長州が主

たる舞台にえらばれる。

ところが、この作品では、ときどき作者自身が、舞台まわし、あるいは説明役として登場するという、いっふうかわった構成をとっている。それは作品の効果をたかめるよりも、むしろ、楽屋話じみて、作者の手のうちや本音をさらけだす結果になっている。ばあいがおおいが、かれの心情と思想のうごきを理解するには、みのがせないところである。たとえば、この作品の発端、一八六四（元治元）年六月、英・米・仏・蘭の四カ国と長州との間が危機一髪の状態にあることを知って、急ぎ留学さきの英国から帰国した伊藤俊輔・井上聞多を便乗させた二隻の軍艦が、長州の攘夷抗戦に警告を発するために瀬戸内海を西航する。瀬戸内の美しい風光が乗組の英人たちをも感嘆させるさまを描きながら、突然ストーリーは中断される。

あゝ、日本の海は、南の海は、どうしてこのやうに美しいのであらう……（中略）作者は日本の国土の——日本の人と自然の美しさを、心から愛してゐる。作者は、他の多くの仲間と共に、日本の

「国法」の名において力を加へられつゝあるものゝ一人である。（中略）しかも確信をもつて、日本の国土への愛を宣言することができる。日本の国土は作者のふるさとである。（中略）作者をして、この物語の筆をとらせたものは、すべての労働者と農民の

胸に共通する、愛するものをうばはれた悲しみ、美しいものをけがされた怒りである。プロレタリアートの作家は、今こそ、秘められた絵巻の封印をきり、けがされた日本の人と自然の中から、しんじつに美しいものをほりだして、ほこりと確信をもつて敵と味方の眼の前にくりひろげる。日本の自然の美を全身をもつてかんじうるものはわれわれである。日本人の胸の奥にひそむ、より高きものに自分をさへげることのできるほこらかな精神を、しんじつにうけつぐものはわれわれである！

作者のこの「日本の国土」——「日本の人と自然」にたいする愛の「宣言」は、なにを意味するのだろうか。「労働者と農民」が「美しいもの」として「愛する」のは、なにか。「日本の人と自然」がもつ「しんじつに美しいもの」とは、なにをさすか。「より高きものに自分をさへげることのできるほこらかな精神」とは、どういう「精神」をいうのか。つまり「しんじつ」の「日本の人と自然」を作者はどのような内容として把握していたかという問題になるであらう。そこでまず二つのことがいえる。この文章には、「青年」執筆にあつた林房雄の創作動機、ひいては当時の心情や思想のありようが語られているとみてよい。そればかりでなく、作品構成からいえば、あきらかに破綻をもちたらず、このような作者自身の登場によって、その内面のなまの表白を、おそらくかれ自身も承知の

うえであえてしたことのうちには、ここに語られている動機に表白の切実さがあつたとみることができであろう。さらに、権力によって制裁をうけている身でありながら「しかも確信をもって、日本の国土への愛を宣言する」という論理の展開については、二つの解釈が可能である。「国土への愛」が、従来のマルクス主義者としての立場からの離反のうえになりたっているのかどうかによって、おきな相異がでてくるからである。離反を意味しないとすれば、「労働者と農民」に「悲しみ」や「怒り」をもたらず「敵」が、「日本の人と自然の美しさ」を「うばい」「けが」しているのであつて、それは「美しさ」という抽象的表現をかり、またあたかも自然美を重視したかのような表現をとっているけれども、じつは「労働者と農民」が生産者としての存在を無視されている社会的現実が比喩的に表現されていることになるだろう。したがつて「しんじつ美しいものをほりだ」すとは、階級社会における「労働者と農民」の生産者としての本来の姿の顕示を意味するといわねばならない。ところが、マルクス主義者としての立場から離反しつつある過程とみれば、この文章は日本美再発見の宣言というかたちでの、かれ一身の階級闘争放棄のきざしとみることができよう。法的制裁をうけている身であるけれども、それを不当としてさらに反抗しようというのではなく、むしろ積極的に恭順の意志をあらわす、そのよりどこ

ろとしての日本美を、あらたに文学者として発掘し再確認しようとする姿勢であるといわねばならない。したがつて「労働者と農民」というのも、庶民あるいは常民というほどの意味に変質させられ、「敵」というのもまた階級の敵ではなく、日本美をおおいかくし、しんじつその姿をあらわすことをはばんでいる非日本の性格のもの——おそらく西欧的知性・西欧的美意識がその内容として意識されていたとみることができよう。(のちにかれは「日本浪漫派」の運動に強烈な共感を示している)。こういう二つの解釈がなりたつたかの論理を、いずれが本質であると判定するかは、やはり「青年」そのものの文学的実質を解明しなければ、確定的な判断はくだせないであろう。

幕藩体制が崩壊しようとする過程のなかで、伊藤俊輔と井上聞多は、時代を転回し推進するたくましい青春像として描かれているが、かれらが「極端な攘夷論者」から「極端な開国論者」に転向する事情と、開国論者として攘夷論の支配的な藩の動向を誘導してゆく経過が、この作品にとって重要な意味をもち、そこにこの時代の象徴的な動きをみようと作者はしている。

長州藩の頑迷な指導者たちは、四国連合艦隊を邀撃しても勝利すると盲信している。藩主・毛利慶親のままで重臣たちを相手に、聞

多は留学によってしりえた先進国の文明の状況を語り、重臣たちの主張する名分論や体面論あるいは極端な精神主義にもとづく攘夷論は、亡国の悲惨を招くものであり、たとえ内乱がおこっても亡国よりましであることを力説する。が、頑迷なからは聞多を臆病者あつかいにするだけであった。そのなかにあつて慶親は、内心の動揺をくりかえす。「城下の侍たちは、ぼくと伊藤を売国の奸臣とよび、攘夷の血祭りにするとふれまはつてゐる。ぼくらの死は案外近いかもしれない」と覚悟している聞多や俊輔について、英艦の軍医プウランの口をかりて「あの青年たちは理想につかまれてゐる」といわせ、さらにかねらの転向を「極端な攘夷論者であつたからこそ、極端な開国論者になれた」と解釈させることによって、作者は立場をあきらかにしている。プウランの「理想のために死ぬるのは青年だけです」「あの青年たちは、きつと開国論の主張をつらぬくでせう。つらぬけなかつたら進んで死ぬでせう。理想がかれらをつかんでゐるからです」と二青年の理解者として語りつつけるが、その熱っぽい口調は作者のそれであるともまちがいないであろう。なぜならば、作者はプウランをはじめから終りまで作者の代弁者としてつかつているし、この長編はこの二青年の「理想」実現のためのたたかひの過程を主軸として描かれたものにはかならないからだ。作者の思想がもっともおおく託されているプウランは「安全を自ら

さけて、定つた死の中に、自らすすんでとびこんで行つたあの二人の青年」に、そしてその背後になにをみているのだろうか。

理想に心をつかまれることによつて、民衆は、一夜のうちに、高貴な神聖な勇士となるのです。人は、昨日までのみじめなごろつきの中に、今日は、苦悩の中に、より高きもののためにたゞかふ、巨人族の姿を見るのです。人間の失はれた原高貴性のかゞやかしい再生を見るのです。（中略）この東洋のふしぎな島もまた、今、生れかはらうとしてゐるのです。古い世紀の重みをはねのけようとして、すべての民衆がうごきはじめてゐます。（中略）人間の原高貴性が、今この島の住民たちの苦しみの中からかゞやきでようとしてゐる……。

ここにはプウランの、したがつて作者の時代把握の基本視点はかりでなく、民族についてのきわめて独自の認識が示されている。人間の「原高貴性」とは、その概念をここに語られているかぎりでは明確にしがたいが、人間、さらには民族が「理想に心をつかまれる」、じつは理想をつかむことによつて、いままでなんらかの事情でおおいかくされていた本来のかがやかしい姿を顕現する、それまでの潜在的だが価値のたかい伝統的な性格を意味していると推測してよいであろう。その性格の発現が、時代の激動、社会の変革をもたらすものとして作者にはうけとめられている。それは言葉をかえ

て、戦後のいまも「コア・バースト・クリティシズム」<sup>⑤</sup>とか「民族の宿命」<sup>⑥</sup>あるいは「民族の血統」<sup>⑦</sup>などかれがよんでいるものとおなじである。したがって「理想」につかまれた人物が、民衆にたいして指導的な役割を演じ、時勢を変革し、推進する主役として活躍するという、人間と時代をとらえるかれの認識の骨格をみることができるとし、俊輔と間多が、そういう主役であるこの長編をささえる根本的な思想が、ここにあるということもできるはずだ。

しかし民族の「原高貴性」という思想と「理想につかまれた青年たち」という表現には、当時の作者の微妙な姿勢をみることができるとはななかりうか。民族の「原高貴性」ないし「核心的性格」というのが、その具体的な顕在化にあたっては、さまざまな様相をみせることがあるにしても、「文明に内在する核心的な、なかなか変り難い」<sup>⑧</sup>根本的な性格としてとらえられていることはまちがいない。すでに「獄中記」第十二信にみえた人間感情の「保守」<sup>⑨</sup>性、第十八信で示した「人間不変」<sup>⑩</sup>という思想が、いっそう拡大深化されて、ここにあらわれているともいえる。そういう根本的性格の存在を容認するということは、この時点における林にとって、マルクス主義からの離脱が正当化される大義名分をひそかに用意したことになっっていないだろうか。すくなくともこの「原高貴性」を無視しては、日本の社会変革はありえないというふうに、思想の隠微な変化が

こりつつあったということはできるであろう。社会変革の心情的志向はすていないけれども、「原高貴性」に媒介されないそれは、なりたないという思想への移行をここにみることができるとも、プウランの所説は、日本に限定されたそれではなく、民族一般の性格の指摘であるから、林のそれまでの認識にふくまれていなかった、民族の潜在的な性格の発見という意味をもつことになって、かれの社会変革の論理は、おそらくここでいっそう深化したと自認されたにちがいない。しかも、これは後年かれが皇国史観を信奉するにいたる第一段階になったと、こんにちからみれば、そういえる論理の変化であったのだ。しかもそれが「理想につかまれた」という「理想をつかんだ」とはいいにくいところに、林の思想変換の過程における心情と論理の動きの微妙さが表現されているといえる。つまり民族の潜在的な性格が社会変革の理想になって顕現し、その理想に「つかまれた」というのは、「青年たち」が主体的・自主的にその「理想」をえらびとったのではなくて、その関係は血縁的・宿命的なものであって、「見えない力にひきずりまはされ」、それに身をゆだねるほかはなかったという論理である。俊輔や間多の明治維新への参画も、「原高貴性」の「再生」とする立場からみれば、まさしく運命であったのである。そのようにみる林自身は、社会変革を志向する心情と思想をいだきながら、民族発展の原動力と

しての「原高貴性」を発見することによって、自己のこれからの思索や行動も、日本の歴史の「核心的性格」につよくひきよせられながら、それとともに歩むべく運命づけられていると認識する立場に、おもむろに移行しはじめているといえる。この推移の過程でめだつのは、歴史あるいは民族の本質を不可変的なものと指定することによって、それになりたいする無視ないし反抗を企てるような人間の生き方は容認できないとする心情的・思想的基盤が徐々に準備されてきたことだ。したがって、まえにふれた、「日本の国土」への愛の「宣言」もまた、権力の強圧から身をまもるための偽装ではなく、文字どおりの日本再発見であって、かれの「日本への回帰」を意味するものであり、「労働者と農民」はその階級性をぬきさられた伝統的「庶民」であり、「敵」とは非日本的知性や美意識をさしていたのだといわねばならないであろう。

そして林は伊藤俊輔の父あての書簡（文久元年三月）を引用している。

しかるところ、このころは江戸表も騒々しく、諸町内そのほかすべて、市内昼夜とも詰番いたし、且つまた諸色の高価に相成候ことゆゑ、世間も自然困窮に相迫り候は、実に憐むべきことと存じ奉候。畢竟は夷人たくさん渡来つかまつり候より、かやう民百姓まで難渋つかまつり候こと相起り、実にくむべきことに存じ奉

り候。（中略）今上天皇様いたつて御賢明の御方様にあらせられ、このたび、かくのごとく日本の人民困窮いたし候を聞こしめされ、御歎息のあまり、黄金五十枚山城国中の百姓へ頂戴仰せつけられ候由（中略）かやうのことまでも御気を用ひさせられ候は、常体の御方様にては恐れながらござあるまじく察し奉りあげ候。

作者がつつけて「民百姓の難渋」する「世相の混乱は、青年たちが、かなしませ、いきどおらせ、現状打破のための」行動にたちあがらせたことを説き、「下士階級の政治的登場はじつに封建制度の解体にともなふ農民の反抗に平行したものであつた」というとき、「理想につかまれた青年たち」と農民の動きに、明治維新推進の原動力の所在をみてはいない。青年たちを回天の事業に奮起させるのは「民百姓の難渋」であるが、その「民百姓」もまたみずからの解放をもとめて苦闘していたというふうには、とらえていない。だから「農民の反抗」が「封建制度の解体」を促進したのではなくて、その「解体」にともなつて「農民の反抗」がひきおこされたという認識である。してみると、かれが明治維新をとらえるばあい、歴史をうごかす力として認識したのは、根源的には日本民族の「原高貴性」であり、具体的には伊藤俊輔や井上聞多に代表される個人―英雄であつて、自己解放をもとめる民衆ではなかつたのである。だか

からこそ、農民を時代の重圧の集中心としてとらえ、それだけに人間解放の燃焼点をそこにおいて文学的に追求しようとはしなかったのだ。そればかりでなく、林の関心も伊藤俊輔とおなじく、激動する時代にはたす天皇の役割にむけられてゆく。

われわれは当時の青年の心に芽生えたユートピズム——「聖き統治者」の再発見と理想郷へのあこがれをみいだし、ほゞそのまま

という。「国法の名によつて力を加へられつつある」と自覚していた作者が、さらにおおきな弾圧の危険を予想して、偽装的にこのよ  
うな表現をとつたのではないことは、もはやあきらかである。それは  
確実に皇国史観への接近のコースをふみだしたといわねばならな  
い。激しくゆれうごく明治維新をとらえるにあたって、林の視野に  
は維新遂行の勢力として伊藤・井上などの英雄たちが中心にすわ  
り、農民の役割があいまいなものになつただけ、天皇の役割がクロ  
ーズ・アップされてきているといえる。そうなると、林にとってこ  
ういうかたちでの民衆の登場は、マルクス主義者として、客観的に  
は思想的移行におけるうしろめたさ、にたいする心情的自己弁解とい  
う意味しかもたなくなるだろう。極論すれば史実を無視できなかつ  
た結果、副次的に農民が登場したにすぎないのだということにな  
る。

しかし、伊藤俊輔が攘夷論者から開国論者に転向し、藩論転換の  
ために命がけの説得をこころみる過程は、心理的にかなり複雑であ  
る。藩論転換の困難に直面して桂小五郎に送った「帰朝つかまつり  
候旨も貫徹つかまつらず遺憾なきにあらねども、死にたくもな  
く、到今ぶらぶらとながらへ候」という手紙の一節は、焦燥と自嘲  
の心境をつたえているが、この事態にいたって、当面する困難だけ  
が、かれの心境の平穩をみだしているのではなかった。幼年時代の  
貧困な生活が「小さな反抗児にもしたが、また小さな野心家にもし  
た。はげしい野望が小さい胸のおくでもえあがつた」結果は「武士  
になりたい」というのが、聞多のように士分の家にもまれなかつ  
たかれの人生目標であった。その幕藩体制内での自己救済の願望  
が、松下村塾をなかだちとする久坂茂助・高杉晋作・井上聞多・桂  
小五郎などとの交流によって、しだいにその方向をかえてくる。お  
のれ個人の願望から日本人ぜんたいの幸福をめざすテロリストに変  
身する。

桜田事変によつて代表される幕政改革のためのテロリズムも、ま  
た全国をうごかした攘夷運動も、現状打破策を必死に探究するか  
れらの努力のあらはれたといへよう。攘夷運動が、討幕の意識的  
スローガンにかはつたのは、長州においてさへ馬関戦争後のこと  
であつて、はじめは、あたらしい貿易関係によつて、混乱させら

れた物価、経済関係を眼のまへにみて、人はみな攘夷こそ最上の現状打開策であると信じてゐたのである。

こういう認識をもつにいたつた俊輔を、仲間の思想がさらにおいつめてゆく。「幕府と旧勢力の悪政のもとで、民百姓をはじめ、武士の身分にあるものまでが、わだちのふなのやうに、明日をしらぬ命にあへいでゐる。それを眼のまへにして、いまさう立身出世でもなからう」「京都には、かつてわが国を、無階級で自由な一国に統一して、合理的な政治によつて万民をうるほした聖天子の末裔があらせられる。いまはほそぼそとしてあらはれぬとはいへ、そのむかし  
の自由な日本は、この聖天子を幕府とおきかへることによつて再生する」——一時は俊輔の「前途の希望の一切をうはひさるものやうに思へた」これらの「同志たちの言葉の一つ一つが、俊輔のくるしい生活経験とむすびつくことによつて」「俊輔の心を変質させて行く」のだ。それでいてなお俊輔は同志たちの「捨身暴発」の行動と「詩酒放蕩」の生活との両面に、みずからつよくひきつけられながら、その矛盾に苦悩している。それにふれて作者は、  
だが、もし俊輔にもつと成熟した経験と、自分を分析する能力とがあつたなら、気がついたであらう。同志たちの生活の「二つの面」といふのは、けつして相矛盾する二つのものあらはれではなく、じつは一つのもの——「逆逆する精神といふ一つのものあ

らはれにすぎないことに。

という。つまり苦悩するのは俊輔がまだ若いからであつて「軋形期の人」にとつて、それは必然の現象であると作者は肯定する。「逆逆者は、ふるきものとたゞかふ場合に理性をもちひない。ただ感情と行為のみをもちひる」「あたらしい理性をもちはじめるとき、逆逆者は、しだいに革命家にまでたかめられる」といふ林の思想がその根底にあるからだ。だが俊輔はまだそのことにおもひおよんでいない、と作者はみている。しかもなお「立身ののぞみをすてたと自分にいつてきかせたとき、心の底にうごいたあのたとへやうのないわびしさの正体はいつたいなんであつたらうか」「すべての世評に心をわづらはされないと決心した自分が、あたらしい同志たちのあひだの評判や批評に、とやかく心を労したのはどうしたわけだらう」と反省した俊輔が、自身を説得する根拠としてつかんだのが、行動の動機の純粹性であつたことは、「獄中記」第二十信で「純粹」で「まじめ」な動機による「転向」を是認した林の論理にてらしあわせるとき、重要な意味をもつてくるといわねばならない。

……もつと美しい、もつと純な動機が自分の心のなかにうごいてゐなかつたらうか？——さうだ、たしかにうごいてゐたとかれば自分に答へた。あの「のびのびとくらしてみたい」といふ、純な、ひとすぢな望みがそれだ。すべての人間が、のびのびとくら

せる世の中が、もし自分たちの力でもたらさうするものならば、それをもたらしめてみたい。その方向に、一步でもいゝから、歴史の流れをおしすすめることができたなら、自分の身を殺してもおしくない——このひたむきな気持が、自分の胸のかたすみうごいてみたことだけは、せめて世間にもとめてもらひたい。さうだ、世間がみとめてくれなくとも、自分だけはみとめよう。

という俊輔はただ立身出世の動機からだけでなく「美しい」「純な」動機——「すべての人間がのびのびとくらせる世の中」の招来に一身をかける動機があったことをもって、みずからの動揺をふせぐよりどころにしようとしている。が、これはもはや俊輔が描かれているというにとどまらないで、むしろ、作者が一月まえの「文学のために」で、「歴史の正しい流の中に自分をお」き「死の床で恥ぢない良心をもつて死にたい」と告白していた心境にいちじるしく接近し、それとかさねあわされて描かれているといわねばならない。

もともと「外国の海軍術をまなびとつて、徹底的に攘夷を行ふ」ための留学であったのが、かの地で見聞をひろめた結果「外国と戦ふよりも、和することによつて、その自由な制度をまなびと」り、「あたらしい社会の到来」をはからねばならぬとする開国主義に転向した俊輔にとつて、立身出世にまつわる内面のやましさは克服さ

れると、あとは行動の世界へ直進するだけであった。が、攘夷論に結集した藩の態勢は、かれらが身の危険を日ごとにかんじるほど、強固なものであった。ところが、藩の首脳部は、朝廷と幕府の命令にしたがつて実行した攘夷——さきの馬関における外船砲撃——の報復として、四国連合艦隊の襲撃をむかえねばならぬ状況にたちいたったいま、朝廷に態度変更を求めめる進言をするために近く藩主が上洛する、その結果が判明するまで三カ月の時間がほしいという内容で、いったんは排除した聞多・俊輔を使節として艦隊に交渉させようとする。ここで聞多と俊輔とは、あきらかにちがった反応を示す。聞多は、藩庁の手まえ勝手な虫のよい返事では不調におわるにきまっているといい、俊輔は「絶望してはいけない」「だまつてすつばかすよりも、こんな回答でもいいから、もつていつた方が、先方にも義理がたつ」と主張する。聞多は潔癖・激情で理想家肌であるのに、俊輔は柔軟で現実主義的な人物として描かれている。しかし交渉の結果はあきらかであった。かれらは外国軍艦からにべもなく追いかえされ、派遣されてきていた二艦は連合艦隊への連絡のために横浜へむけて去る。この段階にいたってもプウランのこの二青年への期待はかわらない。

長州の排外主義は、一見反動的にみえても、底にあたらしい潮流をひそめてゐる。なるほど攘夷思想は、人民の無智と、外国貿易

による古い経済関係の急速すぎる混乱によつてもしだされた、それ自身としては不合理な思想感情です。（中略）しかし、その底をつらぬいてゐる現状打破、幕府打倒といふ根本方向を見のがしてはならない。しかも、長州には、すでにあの二人——志道と伊藤によつて代表される熱烈な開国主義の芽生えがある。かれらの存在は、長州の排外主義は根本において現状打破の急進主義であつて、それはある時期には、容易にたゞしい開国主義に転化することの可能をしめすものにほかならぬ。（中略）長州の現状打破的精神と、あの二人の青年によつて代表される、正しい国際認識の上になつた、真の開国主義とが結合するとき、日本の革命的潮流は、はじめて文明への方向をとるのだ。

これもまた、林の時代認識の代弁としてうけとつてよいばかりでなく、この一編の構想をささえる重要な認識であつたといつてよいであろう。この認識にもとづいて俊輔や聞多、ひいては高杉晋作の行動が描かれてゆくからである。失敗におわたつたものの、かれらのこのような和平交渉は、いたく攘夷派の過激分子を刺激した。そして藩主の世子・定広を擁しての京都進発がつよく叫ばれるようになり、それはついに成功して藩の全力をもつて遂行される。その留守へ四国連合艦隊の来襲がつたえられてきた。狼狽した藩首脳は、ふたたび聞多に攻撃延期の交渉かたを依頼するが、かれはまえのとき

以上に激怒して拒絶し、それどころか、こんどは立場をかえて徹底抗戦を主張する。「いまさら、顔色を土のやうにして、休戦だ和議だとうろたへるよりも、かねての方針どほり、防長が隼土となるまでやりとほす方が、よつばどりつばだ。……さうすれば百年の後、人がいつてくれるだらう。長州人は、じつに頑固で、わけのわからぬやつばかりであつたが、ともかくも、勤王攘夷で自ら滅亡してしまつたのはえらい、と——こう聞多が放言している御前会議の席上に、京都への進発軍が、薩摩・会津の連合軍に惨敗したという情報もたらされ、一同色をうしなう。藩の執行部の二大政策であつた「馬関攘夷と京都進発」のふたつながら失敗ということになれば、政敵の擡頭はとうぜん予想され、いっそう首脳陣を苦境におとしいれる。聞多の拒絶にあつて交渉役が俊輔にまわつて、「防長、人多しといへども、ほかにないのだ！」といわれると、「うれしくなつて、腹の底から自信と力に似たものが、ぼつと炎のやうにもえあがつて」くるのだ。こういう俊輔を作者は「青年たちは、多くの抵抗がたい誘惑を、かれ自身の中にもつてゐるが、その中でも、名誉心はその最大なものの一つである。そしてこの名誉心は、その純粹さの故に、最高の道徳と同様な役割を演ずる。この法則は俊輔の心にも正確に作用した」というふうを描く。しかし、そういう俊輔も聞多を無視しては行動ができず、躊躇するが、連合艦隊がすでに

長州沖合いに投錨しているいまとなつては、薪水食糧の供給と上陸・貿易の自由とを保障する、その代償として砲撃中止を要請するほかはない。俊輔は交渉にでかける。「ここまでできつづけるために、なんといふみじめな努力をさせられたことだらう」という感慨が、いままで命がけできた俊輔をとらえる。が、

今日の、この結果をもたらしたものは、自分の努力であらうか？ さうでない。努力はすべてうらぎられてゐる。目的のためにつとめればつとめるほど、かへつてよけいな障害が生じた。努力を放棄して、あきらめかけたときに、思ひがけぬ事情の変動で、目的の方がこつちに近づいてきたのではなかつたか？世の中には、人生には、世界には、宇宙には、なにか人間の頭では計ることのできない力がうごいてゐるのだ。その見えない力をまへにして、人間の努力がなんであらう？

あるいはまた「ことの成否は、天命にまかせよう。しかし、あたへられた目的のために、死に身がなげばその努力だけは、永久にすてゝはならぬ」とも考えるのだ。ここまでくると、目前の責任は全力をあげてその完遂にあたりながら、時代の大勢については人智をこえた運命的な力の作用——「時のいきほひ」を認めないわけにはゆかない俊輔の、激動期日本にたいする基本的な認識と姿勢があらわれてきたといえる。しかし、こんどの交渉は時機を逸して不成

立におわつた。交渉相手の艦に俊輔たちが到着する直前に、五千余名の兵員をのせた十七隻の連合艦隊は、すでに行動を開始していた。その艦上でプウランは日誌にしている。

ヨーロッパとアメリカの連合艦隊は、商業の自由のために、砲弾をうちこむ。しかし、この砲弾は、歴史のパラドックスによつて、商業以外の自由を、この国にもたらすことになるかもしれない。

つまり「砲弾が、この国の旧勢力をうちくだいて、あの青年たちによつて代表される新勢力——この国の歴史を更新する勢力——に擡頭の機会をあたへてくれるやうに」という願いがこめられていたのである。同様の判断が高杉晋作にもあつた。

われわれの主張をつきとほすために、このさげられない敗戦を、もつとも有効に利用することを考へてゐる。敵の砲弾の一つ一つは、攘夷派の腰骨ををる。諸隊の腰骨を折り、政府員の腰骨を折る。かれらは、開国の必要と旧制度の放棄とを、実物教育によつて、さとられるのだ。この望ましい効果を徹底させるために、おれたちは、おそれながら君公御父子を砲弾のとびかふ下にひっぱりだして、ひとつ、腰骨の折れ砕けるまでやらせようといふのだ。

この高杉の戦略的判断に俊輔は同感の意をあらわすが、「絶望と

混乱」にとりつかれた井上聞多は「決死一戦論」で対抗する。が、結局、高杉と伊藤に説得されて、君公の出陣を要請するための御前会議開催案に賛成した。いっぽう連合艦隊は艦砲射撃で長州勢の砲台を破壊し、陸戦隊を上陸させて海峡のおもな防禦陣地を占領してしまふ。それとともに幕府が長州征討軍をさしむけるという情報がいきりにつたえられ、腹背に敵をむかえる絶対絶命の危機に直面する。このとき、ふたたび四国連合軍との和議が会議でもちだされる。ここで井上聞多は論争のすえ「今後、あくまで開国論でおしとほす」「藩内において、いかなる反対論がおこつても、断然これをおさへつけ、二州を賭して幕府と決戦し、勝を制したあかつきは、馬を中原にすすめて、幕府をたふして、六十余州に新政をしく」という決意を世子・定広にさせることができた。「首席家老・宍戸刑馬」と臨時に名のる高杉晋作を中心とする井上聞多・伊藤俊輔などの講和使節団は、全面的な降伏条件をもって、ようやく和平をもたらすことができた。俊輔たちは「この屈辱のかたに、光栄ある目的をもつて」いることを自覚し「その目的のために、すべての屈辱をしのいで、やるどころまで、やりとほさう」と決意していたのである。調印後、高杉は政務座として山口に、井上は代官として小郡に、伊藤は外国応接掛として下関に、それぞれ配置されたために、その別宴をひらく。江戸小唄と英詩と劍舞の宴である。

読者よ、三人の若ものの、この狂態をとがめたまふな。帰国以来の聞多、俊輔を知り、座敷牢以来の晋作を知つてゐる作者が、もしも、その席にゐたならば、三人とともに、舞ひ且つ吟じたにちがひない。愛する読者よ、作者のこの狂態をわらひたまふな。ここには、高杉・井上・伊藤の三人、とくに伊藤俊輔によりそいながら、この激動する情勢を生きてきた作者の到達点が、ふかい安堵感とともに語られているといふべきであらう。

⑮ 「獄中記」(昭和六年五月十七日)五九頁。

⑯ 前注におなじ、第十八信(九月二十三日)一一六頁。

⑰ 前注におなじ、第二十信(十月二十一日)一二五頁。

⑱ 前注におなじ、(昭和七年四月七日)一八七頁。

⑲ たとえば、吉田松陰・木戸孝允・岩倉具視・西郷隆盛・伊藤博文・井上馨・山県有朋などの名がみえる。

⑳ 「幕府分解接近篇」「雄藩篇」「維新風雲回顧録」「新選組始末記」「維新前後」「維新回天史の一面」「明治維新史研究」など。

㉑ 「日本仏教史の研究」「真宗全史」「宗教心理学」「聖書」など。

㉒ 吉本隆明「芸術的抵抗と挫折」(未来社)一七三頁。

㉓ 中央公論社版(昭和九年三月初版)による。六八三頁におよ

ぶ長編である。

②4 「獄中記」第二部第二信（昭和九年十二月十六日）二二二頁。

②5 石田英一郎「私の日本発見」（筑摩叢書「東西抄」所収）三頁からの林の借用。

②6 林房雄「緑の日本列島」（株式会社文芸春秋）二七四頁。

②7 前注におなじ、一一一頁。

②8 注②5におなじ、三一頁。

②9 「獄中記」八〇頁。

③0 前注におなじ、一一四頁。

③1 前注におなじ、一二四頁。

③2 「改造」昭和七年七月号。

### 3

林は鳥崎藤村の「夜明け前」について、

第一部で明治維新が終つてゐるのにおどろきました。（中略）氏は現在をも「夜明け前」の表題をもつておほはうとしてゐます。

われわれは現代を「人類前史の末期」と理解してゐます。（中略）氏の「夜明け前」は、われわれの「夜明け前」と、少くとも

範囲において一致するわけです。（中略）第二のおどろきは、氏が歴史をまさに「下から」ながめようとしてゐることです。すでに維新の運動をも、氏のことばによれば「叢の中から」おこつた運動としてゑがかうしてゐることです。<sup>②9</sup>

という評価をしめし、「藤村がプロレタリア文学運動へのうつりゆきをしめすとしても」「傍流的うつりゆきをしめすであろう」と限定しながら、なお、この作品によって藤村は「日本のプロレタリア文学運動に、無意識な適応をしめさうとしてゐる」と位置づけている。これらの発言は、こんにちからみると「夜明け前」についての理解としては、はなはだ奇抜であるという感じをまぬかれないが、思想的に障壁にぶつかつていたともいふべきこの時期に、かれがこの作品に一縷の光明と活路を、見当ちがいをおかしながらも、みいだそうとした心情は想像できる。しかし、明治十九年十一月、青山半蔵の狂死をもって「夜明け前」第二部が完結している事實は、「少くとも範囲において一致する」としたかれの判断が、まったくはずれていたことをしめしている。これは「夜明け前」第一部の結末にちかく、

兎も角も今一度、神武の創造へ―遠い古代の出発点へ―その建て直しの日がやつて来たことを考へたばかりでも、半蔵等の眼の前には、何となく雄大な気象が浮んだ。<sup>③0</sup>

とあるにもかかわらず、さらに第二部が予定されていることから、林にしてみれば、明治維新をもって「夜明け」としてはいない藤村の歴史意識について、自己にひきつけた希望的観測をいただき、社会主義でいう「夜明け」と時期的に一致すると速断したためにほかならない。自分同様、藤村もまた「人間による人間の搾取」の終結をもって、「夜明け」と認識しているとみただけはおおきな誤解であった。後日、藤村じしんは「私も庄屋の子なんです、それで、さういふ所から、片ツ方のお百姓、農民とかいふやうなもの考へ方とか、いろいろな点で、ちよつと考へ方が違ふ」「そこがプロレタリアの方の人たちの時勢を観る見方なんかとも、多少違ふ所ぢやないか」と述懐しているのだから、藤村をもって「プロレタリア文学運動に、無意識な適応をしめさうとしている」ととらえたのは、我田引水であったのだ。それとともに、かれが評価する藤村の歴史把握——「維新を単に下級士族の運動、または、ばくぜんと国民的復古運動としてしか系がきえてゐない歴史家」とちがって、「下から」「叢の中から」描こうとしている姿勢への共感が問題になる。これはさきの述懐にもあったとおり「庄屋の子」としてうまれた藤村は、「百姓」「農民」に異和感をいだいていたし、事実、作品についてみても、林の「青年」におけるそれよりも相対的には徹底しているとはいへ、林が評価したほど、それは確固としたものであったと

はいえない。つまり、

大きな歴史の流れをあとづける一定の史観の貫徹がみられないところから、それが全体としてやや風俗誌的に流れるきらいはあった。しかし、なお能うかぎり社会の下層から、つまり時代の「英雄」からではなく、文字通りいわば「街道」や「叢の中から」描こうとつとめられている点に、この作品の歴史小説としての独自さが保障されている。

といわれねばならない二面性をもっていたのだ。しかし、そのことよりも、こういう「夜明け前」につよくひかれながら、かれじしんの作品では、農民を副次的にしからえていないことは、すでに指摘したところである。とすればかれが「下から」歴史をとらえる視点を伊藤俊輔においたという問題のほうだが、より重要になってくる。そのことにたいするかれの弁解は、おそらく貧農から身をおこした俊輔の設定が、まさに「下から」の具体化だということになるのであろうが、それは藤村によって農民の生活——たとえば処罰されることばかりきついても官有林の盗伐をしなければならぬ農民の窮迫した生活——がかなり克明に描かれ、「武士と農民の中間的存在として、激しくゆれうごいた変貌の底にある民衆の心とじかにむきあつて」半蔵がいっそう苦しい懷疑においこまれてゆく関係としてとらえられているのに比べて、林のばあいは、農民の「難

「洩」が具体的には描かれず、たんに俊輔たちの行動の契機となったという説明があるだけであって、その「難洩」が俊輔たちの内面の負担となって行動を束縛する重みをもったものとしてはとらえられていない。作品の展開につれて、農民はまったく林の視野から消え、むしろ武士に登用されたのちの俊輔の活躍が、その「難洩」の翳りさえとどめない颯爽とした姿として描かれているのだから、ますます「夜明け前」の視点とは距離をひらいてゆく方向であったのだ。が、さらに基本的には、文字者として人間解放の願いが、歴史取材の根底にあったかどうかの相違でもあるといわねばならない。だから、半蔵が平田国学の理想の実現として歓喜してむかえた新時代にうらぎられ、狂死にまでおいこまれてゆくのが、日本の近代化に疎外され、下降してゆく庶民の象徴になりえたのにたいして、俊輔の行路は、たとえ命がけの危機に直面することはあったにしても、近代化のコースにそって上昇し、客観的には庶民の期待をふみにじてゆく方向になったのである。両者の歴史把握の立場は、じつはまさしく反対の極にあったのだ。林がみずから誤解してつくりあげた「夜明け前」の幻影に心うごかされて、それが動機になって「青年」を執筆したことはあきらかだが、第一部のみをもってその全貌を予測した軽率さはともかく、そういう速断におちいらねばならなかったほど、心情的・思想的に袋小路においつめられていたこ

ともたしかであろう。しかし誤読は誤読であったといわねばならない。したがって、「青年」と「夜明け前」との関係は、林が「夜明け前」について「いまのわかい作家がほとんどやらぬ助詞切りも、ゆきとどいた考へのもとに採用してゐる」と評価した、藤村独特の文章終結法を、臆面もなく「青年」に採用したにすぎなかったことを確認しておけばよいであろう。

林のとらえた伊藤俊輔が、国事に奔走する自己の行動の正当性を、その動機の「純粹」さにもとめたこと、そしてその動機の純粹性という考えかたは、林が「獄中記」において転向の条件として容認していたところと一致することなど、すでに言及したとおりである。俊輔の行動の動機をそのようなものとして肯定的に描くことによつて——つまり、動機の「純粹」性という一点に抽象することによつて——林はかつて是認した「転向」の要因を、この時点においてあらためて確認したことになる。ということは、さらに俊輔の維新の動乱期を生きぬく過程が、林「再生」の具体的過程であり、俊輔は林にとつて自己「再生」の人物像としての意味をになったということができるからである。林は俊輔を描きながら、俊輔の生きた歴史的条件のなかで、自己を俊輔に投入し、その青春の一時期を生きてみた、そのことをつうじて、じつは自己みずからの変貌の過程

を確定し、その変貌を正当とする根拠を、俊輔の人生行路のなかに描きだしたといえる。プウランが作者の思想的代弁者として、舞台まわしの役割を演じているといえるとともに、描きだされた俊輔像は、いうまでもなく作者の全人間的な投影としての分身であって、つくりあげてみた結果、その行路は作者にとって、もっともこのまじしい人間的・思想的形成の過程であつたと自己承認される性質のものだつたといふことができる。したがつて、「青年」の創作について、

当時はただ今後政治に関係しないことを誓つた程度の転向に過ぎなかつた。(中略)従つて当時の彼の転向なるものは、ただ「政治より文学へ」の転向であり、依然としてマルキシズムを清算してゐなかつた。<sup>④</sup>

とするのや「林房雄は、唯物論を脱脚しようとして『青年』を書いたのではなく、唯物史観にもとづいて書いたのである」<sup>⑤</sup>などの見解には賛同できないのである。これらは林の日本主義に立脚する積極的発言の時期をもって「転向」であると形式的にとらえているか、あるいは、マルクス主義の残滓としてのそれらしい用語に眩惑されるかして、「青年」そのものの文学的実質と、それを創作してゆく過程においてひきおこされる作家主体の変質を、みのがしているからである。かれの文学の「転向」は、あきらかに人間解放の追求を

放棄した「青年」にはじまつたとみなければならぬ。とくに日本民族の天皇信仰をふくむ「原高貴性」への注目と共感は、その後のかれの心情・思想の動向を決定するものであり、かれの「転向」の核をかたちづくるものであつたからだ。

すべての転形期に人々をとらへる解放と反逆の精神は、けつして、人の頭のみにはあらはれない。その全身にはあらはれる。人は古きもの、現存するものに、たゞ思想のみによつて反逆するのではなく、感情によつて、行為によつて、すなはち全身によつて反逆するのである。

という伊藤俊輔への弁護は、プロレタリア文学の画一的な人物形象への批判という一面をもつとともに、ここにいる「解放と反逆の精神」は、特定の社会構造の実現をめざすそれではなくて、俊輔の行動の文脈においてみるとき、それは、一般的な変革の「精神」に溶解してしまつているといえる。ここにも、一種の人間主義の回復がみられるかわりに、変革の質を問わない、したがつて、マルクス主義から離脱してゆく林の心情と思想の変化の兆候を、みないわけにはゆかないのである。「青年」執筆中に書かれた評論「作家として」のなかで、かれはかつて「新時代の作家は記者でたくさんだ」とくにプロレタリア作家は、闘争の従軍記者であり、生活のすばしい報告者でなければならぬ<sup>⑥</sup>と考へていた文学的所信について反省

し、「作家の任務は、いかにひろく材料をあつめるかといふ点にあるのではない。いかに完全にそれを溶かして本質性とリアリティにみちたあたらしい世界を創造するかといふにある」といい、「青年」については「作家としての最初の出発。記者的要素を全力をあげて除き去ること」<sup>④</sup>と自戒しながら、この観点から「夜明け前」について「素材におされて、藤村は作家としての十分に自由な創造的活動をさまたげられてゐる」としている。ところが、かれの「あたらしい世界を創造する」といい、「自由な創造的活動」というのが、それじたいとしてはただしい主張であるにもかかわらず、かれの創作においては、すでに指摘したように、教条主義的な人間観や公式的な創作方法からの自由を確保するかわりに、常識的に人間を——肉体を多面的に浅く描く通俗性を招来するまでに無原則的になつていたのである。おなじ頃、

作家が作家である所以は、すなはち作家の資格は、学者や政治家や新聞記者が、見ようとしても見ることできぬ、または見おとして平気でゐる現実の深秘な部分に光りの如く侵入して行くその能力だ。(中略) これ迄の文学論者は、それを智慧とよび、論理の衣をぬぎ捨てた直観とよび「作家の眼」とよんだ。名前はどうでもいい。幸ひにこれらの資格がぼくの心にそなはつてゐたならば、ぼくの書くものは、はじめて「歴史の通俗的解説書」である

#### 戦時下の文学へその四

ことをやめて、真の歴史小説になる。<sup>④</sup>

という見解をしめしている。作家の創作活動をささえるのが「智慧」や「直観」や「作家の眼」であると主張するのには、プロレタリア作家としての自己批判がふくまれていたにちがいないが、同時に「学者や政治家や新聞記者」との相違にふれていて、かんじんの立場を異にするほかの作家との文学的対立点にまったく言及していないのは、この時点における林の文学主張の立場のあいまいさ、あるいは後退をものがたっているといえるだろう。プロレタリア作家としての反省の反動として、プロレタリア作家がプロレタリア作家として、ほかの作家と画していたはずの一線をも撤回したかみえ。すくなくとも文学方法への反省が、それをささえるはずの作家の思想までも不問にふしたり、あるいは清算主義へむかう傾斜をもつていたことは、否めない事実であろう。

③ 「文学のために」(改造)昭和七年七月号)

④ 「藤村全集」(筑摩書房)第十一巻五三七頁。

⑤ 前々注におなじ。

⑥ 「夜明け前を中心として」(筑摩書房「藤村全集」第十二巻所収)五四七頁。

⑦ 注③におなじ。

⑧ 猪野謙二「島崎藤村」(有信堂)九〇頁。

- ③9 三好行雄「夜明け前」（東京堂「日本文学鑑賞辞典」所収）七一二頁。
- ④0 注③におなじ。
- ④1 影山正治「民族派の文学運動」（大東塾出版部）三一八頁。
- ④2 清水昭三「中野重治と林房雄」（神無書房）一四八頁。
- ④3 サイレン社「浪漫主義者の手帖」所収、一七二頁。
- ④4 前注におなじ、一七五頁。
- ④5 前注におなじ、一八一頁。
- ④6 前注におなじ、一八二頁。
- ④7 「作家のために」（番町書房「昭和批評大系」第一巻所収）二〇二頁。

## 4

小林秀雄は、当時この「青年」について私信のかたちで、読後、心に浮んだ感じを率直に言ふなら、これが林房雄だといふ言葉で僕の心は一杯になつて了つたと言ひたい。（中略）何が歴史小説だ、林房雄まるだしぢやないか、といふ様な事を勿論言ふのではないが、君が誤解しなければさう言つても差支へない。（中略）明治維新の世相を唯物史観の立場から描いたといふ様な

開き直つた印象を得るよりも先づ作者の主観、作者の告白を感じるのだが、これは僕が唯物史観を信ぜず、明治維新史に暗いばかりであらうか。（中略）告白を保証するものは眼に見えない情熱だけだ。偶然の事件の呈する外見の通俗性は、記録の証言によつて容易に壊れるが、在りのまゝの告白の呈する外見の甘さにけつまづかない為には、直観に頼るより他に術がないのだ。誤解されやすいのは君の書いた歴史ぢやない、君自身なのだ。

という感想を語り、さらに「君の文章のあるがままの美しさをしかと感じ」「終篇に至つて、われ知らず眼頭の熱するのを覚えた」ともいひそえている。そして、この「林房雄まるだし」という作品を「小説は一つの架空な世界の創造である」という小説観で弁護しているのがめだつ。これとちがつて否定的な見解をしめしたのが小林多喜二であった。

多くの人たちの批評を読むと、この作品が明治維新を取りあげていると云っているが、私によると、この作品は「人をつかむ」否、「青年をつかむ理想」・理想につかまれる青年についての「会話」の作品であつて、明治維新はただその背景に、「さしみのつま」に使われているに過ぎないようだ。（中略）根本的に驚くべき点は、同志林は「事実として」の明治維新をホンの少しも描き出してないということである。ただブルジョア作家、国粹反動

作家がすると同じように、毛利慶親、聞太および俊輔との所謂「上層での」「尊王攘夷」「公武合体」等々のいきさつを表面的に辿っているに過ぎないということである。

小林秀雄が反マルクス主義の立場から、林のマルクス主義に拘束されない「架空な世界の創造」を歓迎しているのにたいして、小林多喜二は、マルクス主義の立場から林のこの作品の不徹底さを指摘している。が、この両者の感想は、この作品に「歴史はなれ」ないしは「事実はなれ」をみる点では一致しているのであって、前者がそれを肯定しているのに、後者がそれを否定している相違なのである。ただ林が創造した「架空な世界」が小林秀雄のいうように、たんに作者の「告白」の世界にすぎないのならば、小林多喜二がいうとおり、それは明治維新をとりあげなくてもよかったということになるであろう。しかし、林はなにげなく「告白」の背景を明治維新にもとめたのだろうか。

処女作「絵のない絵本」「林檎<sup>⑤</sup>」いらい佳作「繭<sup>⑥</sup>」などをふくめて、風俗小説化の傾向をもつ「S半島の興論」「都会變曲線<sup>⑦</sup>」などの若干の例をのぞけば、林の眼は、労働者階級とそれをめぐる社会状況にそそがれていて、登場人物が社会的矛盾にめざめる過程を、多彩な素材を駆使しながら、軽妙平明な才筆で描いている。が、かの基本的な関心は、日本の現状とその将来という巨視的な問題

と、そこにおける社会変革にあったといえるし、それが状況にたいして文学的にたちむかう姿勢や方法を変質させながらも、状況設定のパターンとしては持続していた。それが「青年」においても明治維新という舞台をえらばせたといえるであろう。このことは、その後の長編「壮年<sup>⑧</sup>」「西郷隆盛<sup>⑨</sup>」についても同様にいえることである。かれにとって作品の大枠として「日本」を設定することは、そしてそこできなほどうかの変革を志向することは、マルクス主義者としての意識の持続として、主観的にはもとめられた条件であったのかもしれない。ということとは、マルクス主義者とのちの日本主義者としてのかれを貫徹するのは、壮士的な愛国の心情であり、激情的な自己主張であったからである。それが、政治の優位性の強調がつづいていた時期に、「作家のために」「文学のために」「作家として」などによって、文学の政治からの解放を主張することにもなっていた。戦後は「大東亜戦争肯定論」の展開ともなるとみられる。したがって「青年」の「告白」は、小林秀雄の理解とはちがって、作中人物に託して自己の真情を吐露するという傾きをもちながら、作中人物のせおわされている歴史的条件を全身的に生きてみることをつうじて、その具体的過程によって逆に作者自身の心情や思想が形成されるという、自己再生の方法だったのであり、それだけに変革の舞台としての明治維新を必要としたといわねばならな

い。と同時に、小林多喜二のように、その「歴史ばなれ」を非難するのもあたらぬであろう。「事実として」の歴史がかかれていないことは、文学にとって欠陥にならないどころか、むしろ「歴史そのまま」であるとすれば、それは文学にとってほめられることではない。要は「歴史」、つまり文学にとつての現実をどのような視点からとらえ、文学世界に創成しているかが問題であるはずだ。明治維新を作家として、どのように創造的に描いたかが分析されねばならないであろう。その点、「青年」は激動期における人間群像をとらえながら、文学にとつて不可欠の要件である人間解放の志向を放棄していることが、根本的な問題であるといふべきである。農民の描き方にそれが端的にあらわれていることは、すでに指摘した。一種の人間主義——自然主義的人間像の回復をもって、文学の政治からの解放であると錯覚し、そのことよって、もっとも重視すべき時代の被害者を視野から欠落させたところに、文学者としての林の致命傷があったし、「青年」いぜんの作品群にくらべたとき、文学の転向があまりに看取できるのだ。歴史学の成果を忠実にふまえなかったことが「青年」の欠陥であったのではない。かれが、プロレタリア文学の政治優位の思想から自己を解放しようとして、人間の肉体の回復をめざしたのは、それはそれとしてプロレタリア文学史上、まったく無意味な試みであったとはいえないけれども、それ

が人間解放の思想にふかくささえられず、浅薄で通俗的な肉体の回復にとどまらざるをえなかったところに、プロレタリア文学の弱点を、真に克服する方途を発見できなかった理由があった。獄中、自己再建の方向をつかみえなかったかれは、文学作品のなかで、あたらしい状況のなかに自己をおくことよって、それを求めるほかはなかったのである。そのあたらしい状況としての「日本」にロマンチックに感応して、はげしく自己を放下して埋没していったのは、そのためである。そこにはその状況を作中人物とともに生きぬくことで、自己を再建しようとするつよい欲求があったのだ。つまり、作中人物と自己との相互作用によるあたらしい人間像の創造が、熱願されていたといふべきであろう。そうして生まれたのが伊藤俊輔像であった。しかし、その俊輔が博文として登場する「壮年」になると、

全篇の主人公は、伊藤博文の如く見えて、実は日本そのものである。だが伊藤博文の生涯は、その晩年に至るまで「明治の精神」によつて貫かれてゐた。明治を描くにあつて、伊藤博文の姿が正面に現れてくるのは決して偶然ではない。<sup>50</sup>

といいつつ、かれは博文とやや距離をおきはじめる。自由民権運動の弾圧の先頭にたつ博文をめぐって、医師・大戸田兵衛、その甥・一郎、二郎を設定しなければならなくなっている。一郎は優秀な官

僚として博文を補佐し、二郎は伊藤を敵とする民権運動に加担している。そのふたりの甥のそれぞれの立場に兵衛は理解を示し、博文とも親交をたもつ。博文とつかずはなれずの距離をたもち、これらの諸人物を設定して、それぞれに共感しながら、「日本そのもの」を描いたと語る作者は、この作品の扉に「この書を、わが愛する父母の国　わが愛する子孫の国　わが愛する日本に捧げる」という献辞をしるしている。この作品の展開をみると、もはや博文ひとりを追求することでは、かれの主体が明治十四年からはまるこの「作品の時代的現実」に、対応できなくなったことをものがたっているといわねばならぬだろう。博文をこえて、さまざまな人間像を創造しなければならなかった。この作品の原稿が完成してもすぐには印刷にまかせなかつた理由として、

明治といふ時代の複雑な性格がいよいよ激しく私の前に現れ、私を悩ましはじめたからである。<sup>④</sup>

とっているのは、「青年」よりもはるかにつよく歴史的事実を拘束された結果、<sup>⑤</sup> 諸人物と林の關係が「青年」にくらべていっそう複雑であり、刊行までにおおくの加筆を必要とした事情がうかがえる。「青年」において自己再生という意味をもった俊輔像を、こんどはさらに拡大して「日本そのもの」の追求のなかに試みようとはじめた作者をここにもみることが出来る。小林秀雄が「諸人物の私

的生活といふものは殆ど顔を出さない。一切は思想に憑かれた諸人物の思想的交渉で統一されてゐる<sup>⑥</sup>」というのも、このような意味に理解すれば首肯できる。作品の大枠としてあった「日本」が、こんどは「そのもの」として追求されるところへきたのである。第二部で自由民権運動の凄絶な弾圧を描きあげたのち、

この混乱と悲劇を押切つて、日本の運命を救ふ思想と行動は何であるか、どこにあるか？——大戸田兵衛はそれを探さなければならぬ。愛する二人の甥の危難を眼の前に眺めつつ、この困難な探求を行はなければならない。<sup>⑦</sup>

と語った作者は、このように「壮年」第三部の主題を示すなかで、「日本の運命」を直視しようとしている。しかし、この第三部はついに書かれなかつたし、「獄中記」で予定していたように、「青年」「壮年」につづいて「老年」を書くこともなかつた。かれの精神は人間をはなれ、たかく「日本そのもの」へ飛翔してしまつた。そして「壮年」第二部刊行の翌年、かれの「愛する日本」は、太平洋戦争へ突入していったのである。

④ 「林房雄の『青年』」(新潮社「小林秀雄全集」第三卷所収) 八二頁。

⑤ 「右翼的偏向の諸問題」(富士出版社「小林多喜二全集」第九卷所収) 二四八頁。

- ⑤〇 一九二六（大正一五）年二月発表。しかし同年五月発表の「絵のない絵本」のほうがさきに執筆されていた。（新潮社「文学的回想」二二頁）
- ⑤一 一九二六（大正一五）年七月。
- ⑤二 いずれも一九二九（昭和四）年。入獄の前年である。
- ⑤三 一九三五（昭和十）年から「中央公論」に連載。
- ⑤四 一九三九（昭和十四）年から「都新聞」に連載。
- ⑤五 「後書」（第一書房「壮年」第一部）四三一頁。
- ⑤六 「あとがき」（第一書房「壮年」第二部）三六一頁。
- ⑤七 「壮年」第一部の「後書」に「小説構成上の必要から生じた史実との遊離は、黙ってみのがしてもらひたい」とし、
- 「青年」で「歴史家的批評」に困りはてた経験をかたっているにもかかわらず「壮年」にはその拘束があらわれている。
- ⑤八 林房雄「乃木大将」（第一書房）巻末所載の批評。
- ⑤九 注⑤におなじ、三六二頁。

5

かれはみずから「頭は共産主義者かもしれぬが、行動は百パーセントのアナーキストであつた」と回想しているように、実践運動家

としても作家としても党と至近距離にありながら、ついに黨員にはならなかった。その理由を「派手で贅沢が好きで、現世的な怒が多すぎる」「圭角だらけの我儘者で」「干渉や統制の大嫌ひな独立自尊派」という自身の性格にもとめている。たしかにそういう側面もあっただろうが、かれが「日本浪漫派」の運動に共鳴して獄中からかきおこった主張は注目されねばならない。

浪漫の真精神は、世俗への反逆であつて、即ち新しき現実の追求と創造にほかならず、すべてこの運動が起るのは、若い世代の中に蓄積された文化的精力の爆發によるのです。古い「現実」の泥沼に四つばひになりながら、リアリズムのお経をよんでゐる「現実主義作家」たちが文壇に充滿してゐるとき、新しい「現実」の大地に足をつけて、高く大空と太陽を仰ぐ作家たちの浪漫運動は起らざるをえないのです。浪漫精神は、一言にしていへば、高貴と激烈です。高さと激しさです。高い憧れ、激しい熱中。高い誇り、激しい怒り。高い孤独、激しい異端。高い教養、激しい哀愁。高く激しい俗世嫌悪！これを浪漫の真精神とすれば、日本の現代文学は、いかに長い間、浪漫精神を忘れてゐたことか。浪漫精神は、文学の故郷です。忘れられた故郷です。文学の再生を理想とする精神が、この聖地の回復を目ざして集り始めたといふ事実は、まことに喜ばしい当然です。

「日本浪漫派」の胎動にたいするこの熱烈な期待は、「青年」完成後のかれの文学的方向をもがたっているし、かれが至近距離の「同伴者作家」の立場から、一九三六（昭和十一年）年の「プロレタリア作家廃業」の宣言にいたる、決定的な第一歩をしめす文学的信の表明であったといえよう。「世俗への反逆」がじつは「日本そのもの」の発見を意味する必然性をもっていたからである。「日本浪漫派」を「近代日本文学の正統な流れの正統な発展」と評価するにいたった林の主体のなかでは、プロレタリア文学のもった現代性が、文学的にきたえられ深化されるまえに見はなされたことをも意味するのだ。このことが一九四一（昭和十六）年に「転向に就いて」を林が執筆する基盤としてあったことをみとめておかねばならない。

一言にして言へば、マルクス主義は決して日本人の永遠の心の支柱となり得るものではない。十九世紀の西洋の階級社会に発生した一つの理論的独断にすぎない。それは一つの主義であるかもしれないが、人をして喜んで死なしめる大義ではない。（中略）国民の精神の支柱は国民の内部から生れたものでなければならぬ。三千年の伝統のおのづからなる成果でなければならぬ。この成果がおのづから輝き出したものが即ち国民の大義であつて、人は喜んでそのために死ぬのである。（中略）僕が転向を意識したのは十

#### 戦時下の文学（その四）

年前であるが、マルクス主義の文献を全然不要にして低級な文献として未練なく書齋から放逐できるまでには七、八年かゝつた。即ち意識の転向だけではなく、心情の転向の期間を必要とした。

（中略）転向の目的は社会復帰であり、忠良なる日本国民としての復活である。（中略）転向とは、単に前非を悔ゆるといふことだけではない。過去の主義を捨てるといふことだけではない。共産主義を捨てて全体主義に移るといふことでもない。——一切を捨てて我が国体への信仰と献身に到達することを意味する。

これは林の到達点をもがたっているだけでなく、「青年」にあらわれていた民族の「原高貴性」の思想が生きつづけていることをしめすとともに、二年後の一九四三（昭和十八）年に、

神と天皇の前にひざまづき、我が罪業の深さを自覚するとき、我が胸、我が腹、我が四肢五体のすみずみより、ほのぼのと葦芽の如く芽生え出るもの、これぞ、この心こそ、勳皇の心である。

と、たからかに「近代の超克」を叫ぶかれの立場の前提ともなっていた。

「日本の文学よ、お前の本然の姿をとりかへせ。お前こそ国の子である。国によつて生れ、国を榮えしめる雄々しい息子である。日本の文学の正しき血統と道統を継げ。現代文学の一切の汚穢を拒絶せよ。文学の求むるまことの純粹は勳皇の心の中にある。お

前の心の中のこの心のみを育てよ。右を見るな、左を見るな。ただ一筋にこの心の示す道を歩め。」

これぞ我が祈り。日本の神々よ我が貧しき祈りを聞きとゞけ給へ。文学もついに林によって天皇制に帰順させられたといわねばならない。かれ自身「満洲建国は明治維新の正しき帰結であり発展であった」とする立場から、満洲建国小説「青年の国」をかき、また一九四〇（昭和十五年）年から戦後にかけて「西郷隆盛」全十一巻をかいた。さらに「青年」は戦時下の時流にふさわしく改作されたものである。

戦後のかれの文学は「荒廃」の一語につきるであろう。その通俗化はとどまることをしらない。しかし、かれの東亜解放百年戦争史観にもとづく「大東亜戦争肯定論」や「緑の日本列島」は「激情型の時流のラツパ卒」の本領を發揮したものであり「戦前の蓑田胸喜らのたどった道を想像させる」にじゅうぶんである。また三島由紀夫との「対話・日本人論」は、「近代の超克」や座談会「現代日本および日本人を語る」でのかれの発言のもつ思想と姿勢が、そのまま生きている戦後版ということが出来る。したがって「明治百年記念準備会議の委員として、体制側の思想動員計画に深く参加すると同時に、彼自身、その思想——日本大國論の幻想を形成するために、エネルギーに活躍している危険な存在」として弾劾されね

ばならないのである。

「皇国史観」と呼ばれることを恐れることはない。学者の良心と志をもって研究すれば日本の歴史家は必ず「皇国史観」に接近する。

という現在の放言も、あの「青年」をかかなかったならば、到達することのなかった地点での確信であろう。こういうかれを三島由紀夫が、

昭和の知識人の不安と動揺とつかのまの確信の歴史を、もつとも大つびらに、もつとも莫迦正直に、もつとも損な立場で、明快に歩いてみせたこの人。その過程の、女々しい心理的複雑さを、故意に踏みじつて人々を怒らせたこの人。実際或る意味では、林氏ほど、世間の大切にしているニュアンスといふものの冒瀆者はないのである。

林氏の軌跡を明確に辿りそこに一本の筋を通すことなしに、昭和の知識人を語らうとすることは、すべて怠慢だと私には思はれた。この変転只ならぬ時代の知識人の運命を、林氏を除外して論ずることは、ほとんど徒爾だとさへ思はれた。さう思はせるだけのものが、たしかに林氏にはあつたのだ。

といているように、好意的にとらえることはできないであろう。権力の強制によらない自発的転向を、あえて知識人としての林の変

節として非難しようというのではない。「青年」の俊輔に農民の「苦渋」がなんら影をおとさないように、戦争の非人間性に眼をふさぎ、戦争の犠牲者であると同時に他民族にたいする加害者でもあった日本民族の過去から、なんの衝撃もうけていないこと、あの戦争のもたらした「臣民」の悲惨を具体的に想像しようとしな

いことに、文学者失格の理由をみるのである。  
歴史にも、人間の一生にも、負けるとわかってもらなければならぬ戦いがある。たくさんあるわけです。日本人をあれだけ頭張らせて、世界史を転換させたのは、特攻隊精神であり、あなたの言う神風連の精神であったことはたしかでしょう。<sup>66</sup>  
という、文学者として許されない人間蔑視の思想が、今日もかれの立場であり、したがって文学存立の人的基盤が、もはやかれからは完全にうしなわれているとみななければならないのである。文学者の責任を放棄した口舌の徒の末路、ここにきわまるというべきであろう。

前注におなじ。  
「勤皇の心」(創元社「近代の超克」所収)一一九頁。  
前注におなじ、一二〇頁。  
一九四三(昭和一八)年(文芸春秋社版)三八〇頁。  
創元社版。  
「新日本文学全集」(改造社)  
番町書房版。  
番町書房版。  
色川大吉「明治の精神」(筑摩書房)二二二頁。  
文芸春秋社版。  
和泉あき「林房雄のイデオロギー」(勤草書房「対決の思想」所収)二四頁。  
「改造」昭和十二年五月号。  
和泉あき「林房雄のイデオロギー」(勤草書房「対決の思想」所収)二四頁。  
「緑の日本列島」一一二頁。  
「林房雄論」(新潮社)九九頁。

⑧① 「文学的回想」(新潮社)二二六頁。

⑧② 昭和九年十二月十六日(「獄中記」第二部所収)二一二頁。

⑧③ 昭和十年三月創刊。

⑧④ 注⑧③におなじ、九八頁。

⑧⑤ 「出獄感想記」(サイレン社「浪漫主義者の手帖」所収)八

㊦ 「対話・日本人論」(番町書房) 一三四頁。

付記

脱稿後、林の「青年」が伊藤博文の回顧談「馬関戦争前後」(筑摩書房「現代日本記録全集」2所収)に構成もエピソードも全面的に依拠している事実を発見した。これは、林房雄と伊藤博文との作品成立の過程における交渉関係を、林の主体形成にとって、決定的なものと判断した本稿の見解を補強する事実である。が、いまは本文のなかで言及できないので、他日を期したい。

(六八・一二・一五)